

## 終末期ケアに活かす「価値の明確化」

## A Study on Patients' Values-clarification in End-of-life Care

福田 千加子 (Chikako Fukuda) 指導：土田 友章

【問題と目的】日本人は人生90年時代に入り、「長寿国のフロントランナー」といわれる。しかし超高齢社会は、慢性疾患患者の増加に伴い、終末期医療のあり方が課題になっている。すなわち、End-of-lifeステージが長引くことが課題であるが、日本人は治療方針を医師に委ねたいと考える傾向が強く（松井, 2007）、さらに明確な自己表現を控えることを伝統的に求められてきた社会である（会田, 2013）。

そこで本研究では、本人の語りを引き出し、語りによって潜在していた価値に気づくことを促すために、Acceptance and Commitment Therapy (ACT) の適応を検討する。ACTにおける価値とは、こんなふうに生きていきたいという人生の方向性である（熊野, 2012）。そして本人の価値が明らかになることによって、Advance Care Planning (ACP) の実践にも有益となることが推察される。ACPは、意思決定能力の低下に備えて、本人の価値を確認し、個々の治療選択だけでなく、全体的なケアの目標を明確にしていく、継続的コミュニケーションのプロセスを重視する（Thomas et al., 2001）。そのプロセスに、ACTの目指す「価値の明確化」が活かえてくることが期待される。本研究の「価値」とは、自分にとって大切なことと定義する。

【方法】調査対象者：東京都内のクリニックに通院している前期高齢期（65～74歳）にあたる2型糖尿病に該当する者（以下DM）で同意が得られた56名（男性52名、女性4名；平均年齢68.79歳、SD 2.90）。HbA<sub>1c</sub>平均6.67%（SD 0.79）。調査指標：①フェイスシート、②日本語版WHO-5精神的健康状態（WHO-5-J；Awata他, 2007）、③日本語版Acceptance and Action Questionnaire-II（AAQ-II；嶋他, 2013）：体験の回避を測定、④Values Clarification Scale（VCS；齋藤他, 2014）：価値の明確化とコミットメントを測定、⑤日本語版Attitude toward Death Scale for Adult（ATDS-A；丹下他, 2012）：死に対する態度を測定、⑥ACP（広島県地域保険協議会, 2014）、⑦ACT「墓碑銘のエクササイズ」、⑧DM治療に関して「DMと共に歩むうえで、一番大切と考えていること」・「DM治療経験から部下や同僚に伝えたいこと」・「DM治療において困難感やストレスに感じていること」・「DMに対する思いなど自由記述」

【結果】VCS尺度の回答により選択された価値の領域は、健康・家族関係の順であった。「墓碑銘のエクササイズ」の援用により選択されていた価値の領域は、家族関係・健康で

あった。選択された価値と、糖尿病治療を継続する方向性では、VCS下位尺度「行動継続」において、方向性が一致している者の得点が有意に高かった（ $t[42] = 2.21, p < .05$ ）。将来自分自身で自分のことが決められなくなった時に対する現在の希望や思い（ACP）に対する複数回答では、人の迷惑にならないこと・身の周りのことが自分でできること・落ち着いた環境で過ごせることの順であった。Figureに示したモデルを構成し共分散構造分析によるパス解析を行った結果は、死に対する恐れに関しては、価値が明確化されると、死を肯定的に捉えることができるが、死を肯定的に捉えられたとしても、気持ちが揺れ動くこともある。人生には回避したいようなこともあるが、あるがままに受け止めることで、精神的健康状態が安定することが示唆された。

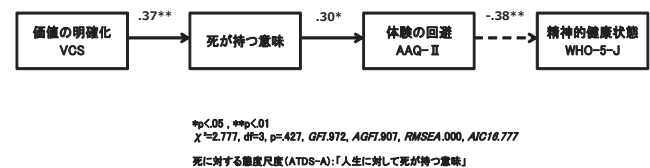


Figure WHO精神的健康に至る影響のパス解析結果

【考察】本研究の目的は、本人の語りを引き出し、語りによって潜在していた価値に気づくことを促すための基礎研究を探索的に起こうことであった。そのためには、自分にとって大切なものは何かを言語化する手がかりを探るために、ACTの「価値の明確化」の適応を検討した。VCSの回答では、価値の領域を記述していた者は49%（89.1%）、「墓碑銘のエクササイズ」では30名（54.5%）であった。価値を言語化する試みに関しては、おおむね可能と推察した。ACP関連では、差し迫った死を意識する段階ではないが、日々の治療を継続している、定年退職を迎えた者が半数含まれている状況から今回の回答が選択されたと推察する。またACPプログラムにおいて、死に対する恐れと懸念を明らかにした上で、自分の価値の意識化が求められているが、Figureの結果から、死に対する揺れ動く気持ちをあるがままに受け止めることの必要性が示唆された。以上の結果から、ACTのアプローチの1つである価値の明確化を手がかりに、ACPの話し合いのきっかけをもつことは可能であることが推察された。今後は、具体的なACPの支援に、ACTの視点を加えたプログラム開発が課題である。